

200歳 万歳!

200歳まで生きる会 H十九年二月第九号

免疫力が上がればすべてが上がる 免疫力アップは新たな時代を生きる必須条件

近年、新たにいろいろな感染症が猛威をふるい、多くの人たを不安に落とし入れていきます。

たとえば、二〇〇二年から翌年にかけて大流行したSARSですが、これは感染した場合、一〇〇人に一人の割合で死亡します。かつて大流行し、世界を震撼させたスペイン風邪では、すでにご存知のとおり、世界中でゆうに五〇〇〇万人の人びとが亡くなったとされていますが、これも、一〇〇人に一人の割合で死亡した結果です。

しかし、こうしたデータが公表されているものは、まだ救いがあると言えるかもしれません。先に述べた鳥インフルエンザについては、その感染者が一〇〇人中五〇人までが死亡しているという事実をご存知でしたでしょうか。そして、この事実が公表されていないことを…。

現在、世界の人口は六〇億人ほどです。このうちの何パーセントが鳥インフルエンザで亡くなっているのかという統計はまだ発表されてはいません。

何の対策も見つけられないまま、本当のことは見逃されてしまい、つまり、鳥インフルエンザに対し、打つすが何もないという確然たる現実がすでにそこにはあるのです。

人間の免疫力は、加齢とともに低下することが以前から知られていました。

しかし、私達を取り巻く今の環境にあつては、そうした加齢のみに限った問題ではなくなっているのです。

日常生活ひとつをとってみても、食生活においてはインスタント食品、加工食品の氾濫や、あくなき飽食。機械や交通機関の発達の結果もたらされた運動不足。多様化された社会生活に対応しきれずに絶えることのないさまざまなストレス等…。こうした多くの免疫力低下要因にあふれているのが今という時代です。

また、文明の開発とともに進んだ自然破壊、大気汚染、水質汚染、土壌汚染、オゾン層破壊による紫外線増加など、悪化の一途をひた走った結果もたらされる脅威は、鳥インフルエンザの比ではありません。

本当に怖いのは、かつてこの地上を歩いていたウイルスです。一〇万年前に猿が持ったウイルスは全部地中に染み込んでいます。今の地球上にはまだあらわれてはいませんが、環境が変化していくと、それと比例してあらわれる可能性は高まります。

地中に封印されたまま眠り続けていた一〇万年前のウイルスが目覚ましたとしたら、現在の医療では完全にお手上げでしょう。

旧ウイルスは非常に強烈で、鳥インフルエンザやHIVといった新ウイルスの比ではないとされているからです。

しかし、たとえばこのままアフリカの緑を伐採し続けていると、旧ウイルスは目を覚まし、再び地上に甦ることは間違いありません。私がエジプトの砂漠の緑地化運動を行っているのもこのためです。

旧ウイルスが一番多いといわれているのは南極で

すが、さながらこれは、冷凍保存されたような状態にあります。ですから、地球温暖化により北極や南極の水床から解け出して海水面が上昇し、「あわや日本沈没」ばかりが危機的なのではなく、むしろ眠れる旧ウイルスが這い上がってくる目の前に差し迫った危機的状況こそが懸念材料ともいえるのです。

しかし、今なお極地の氷は、急速なスピードで解けているのが動かざる現実です…。
環境破壊やオゾン層破壊というのは、明らかに人類が自滅する方向にあります。こうした事実を踏まえたうえでいうならば、環境保全にとめることはもちろん、この時代を生き抜くためには、免疫力をアップさせようとする自分自身に責任の所在があると言つても過言ではないのです。



首藤 尚文(しゅうとう なおたけ) プロフィール 青森市生・蠅座
建築家、数学者、ディアナサンダイヤモンド開発者。
シュトーレン幾何学による未来炭素葉他を、東北大学金属研究所川添
研究室と開発中! (化学分野) 又、シュトーレン数列の黄金曲線による未
来コンピューターシステム (7 進法) を元マイクロソフトプログラマーと
(現在より8倍早いプロセッサ) を開発中(システム工学分野)
著書に「ダヴィンチの黄金ピラミッド」、「モナリザを解く」「政宗の黄金の城」
著書については、一般書店完売のため銀座ショールームにお問合せ下
さい。
TEL:03-3289-0144

特集記事

「不 死」

今、世界で静かに「不死」（人間は死なない）という考え方が広がっています。

今月はその特集記事を組むことにします。

長寿の究極の秘密は、不死の考え

健康長寿の鍵は、気のエネルギーを十分に体内に取り入れ、あるいは気を練り、蓄積していくことです。その教えを説き、実行法を説いているのが仙道に他なりません。仙道を行うと、200歳以上生きることがごく普通のことになります。

健康長寿の最も秘密の鍵は、実はそれ以上に「不死」の考えを持つことが大切なのです。

「人は、死を予期するので死ぬ」。これは「不死」という本を書いたレオナルド・オーの言葉です。思いの波動に死のホルモンを発生させる力があるということです。

人間は共鳴波動の原理で生きているのです。イメージするとイメージした通りの結果を、共鳴波動の原理で引き寄せます。病気をイメージで治癒させるのも共鳴波動の原理なら、死を引き寄せるのも死の概念の波動であるというわけです。

ディーパック・チョプラは言います。「この物理

的世界は、私たちの中に存在する物質とエネルギーを組織化する知性を写す鏡に過ぎない」。つまり、この世は私たちが意識するとおりの世界が現出すると言っているのです。

私たちの身体はエネルギーシステムそのもので、常に情報を受発信しています。私たちの身体は、実は肉体だけの身体ではなく、4つのボディからなると、不死の考えを説くジャススムーヒンは言います。肉体と感情体、メンタル体、霊体の4つです。

それぞれのボディが異なった波動と周波数を持つています。私たちの身体の中に、それぞれ周波数の違うボディが内在しているのです。

私たちの身体はエネルギーシステムでできていますが、単一のエネルギーシステムではなく、それぞれのボディがそれぞれのエネルギーシステムで働いているのです。

それらを動かしているのは、実は私たちの意識なのです。私たちは、自分の体内のエネルギーシステムを無意識に使っていますが、これを意図的にコントロールすることを学べば、私たちの人生はまるで違ったものになります。肉体を不死に変えることが可能なのです。

太古の昔は不死の考えが当たり前でした。創世記5章の27節にメトセラというノアの洪水以前の族長のことが出てきます。彼は969歳まで生きたとあります。ノアもまた長生きで、彼が箱舟

を作ったのは600歳だったといわれています。

死を予期しないこと

死を予期したり、死を必然とする観念は、脳下垂体や松果体などの内分泌腺に影響を及ぼし、生命を再生する細胞内のDNA情報を換え、死のホルモンを生成します。死の観念は、高いレベルの毒素を生み出してしまうのです。

これらはすべて共鳴波動の原理に基づきます。逆にどうすれば不死は手に入らぬでしょう。不死は当たり前という観念に、波動共鳴することが大切です。そうして4つのボディのエネルギーシステムを自由にコントロールすることを学ばなくてはなりません。

その一つが仙道なのです。中国には古来から、三教があつて、儒学、仏教、道教がその3つです。仙道というのは、その三教の中の道教の教えの一つで、道教仙道といっています。仙道を行って、仙人になった人は、インドと中国と日本にしかおらず、あまり仙道の教えは世界中に広まりませんでした。なぜ広まらないのか。それは教えが難しいからだといわれます。でも仙道を行って、確実に200歳を超えて生きた人々が、過去に存在し、今も存在するのです。

この人たちは、気のエネルギーつまり波動（宇宙エネルギー）を自由にした人々です。中国五〇〇〇年の昔から宇宙エネルギーを自由に活用する

人々がいたということになります。李青雲という

人は250歳のときに、200歳を超えて生きるための本を書きました。題して、「250歳老人、李青雲 不老長生法秘訣」という本です。

200歳を超える長寿を得るのは、夢の話ではなく、ごく現実的な話なのです。

宇宙エネルギーを体内に取り入れることを学ぶ

200歳を超えて生きる仙人たちの話は、おとぎ話、単なる伝説と捉えられがちですが、それは決して単なる伝説ではないのです。仙人たちは、霞を食べて生きている、つまり気のエネルギーを食べるだけで、生きているのですが、そんなことはありえないと否定してしまいがちです。

仙道には「辟谷の法」というのがあります。これは、食を摂らず、宇宙エネルギー（プラーナ）を体内に直接取り入れて、食物を一切摂らずに生きる行法です。それこそ波動の十分な活用法といえるでしょう。

今、「不食・人は食べなくても生きられる」（山田鷹夫著／三五館）という本が出ています。著者の山田鷹夫さんは、もう3年間も水を飲むだけ、たまに青汁を飲むだけという生活を続けていて、肌は瑞々しく、病気一つせずに生きておられます。山田さんがその本を出して以来、山田さんに倣って不食を実践する人たちがどんどん増えているの

です。

山田鷹夫さんだけでは限りません。日本総合医学会関西西部会の理事、森美智子先生も、もう10年近く、1日の食事を朝青汁1杯だけしか取らないという生活を続けておられるそうです。こういう事実を知ってみると、これまで与太話と思われていた仙人の生き方が、俄然現実味を帯びた、人間の生き方の手本になってきます。

断食をすると体内の波動が変わる

不食の生き方をすると、ありえない能力が覚醒するのです。人間の体内に隠れていた不思議な能力が目覚めてきます。不食を続けていて、運動能力の低下や思考の能力の低下などはないのです。

不食というのは、山田さんの作った言葉で、断食のことです。断食、少食こそ、健康の大元なのです。

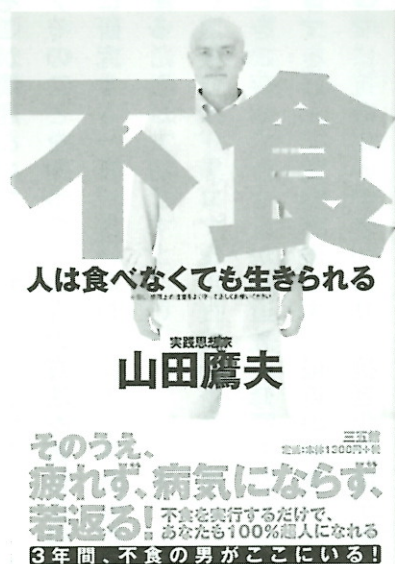
断食には、実は人の知らない秘密の働きがあるのです。それは、人間の体を初期化するという働きです。初期化とは何でしょう。人間の細胞を逆に若返らせる働きです。山田さんは、自分の不食のヒントを1997年に読んだ、「クローン羊ドリー」の話から得たことを本に書いておられます。イギリスのロスリン研究所で、バイオテクノロジの科学者がクローン動物を誕生させたという話がドキュメンタリー小説「クローン羊ドリー」という本に書かれ、それを読んだことがきっかけ

になったというのです。

それまでは細胞は逆進化しないということが常識であったのに、ドリーの実験では逆に乳腺細胞が逆進化して全能性を持つ細胞に復帰したとされます。

断食下におくと、細胞は自然防御のメカニズムを働かせ、それまで切られていた遺伝子情報のスイッチがオンになって、情報がリセットされるのです。そのため、不思議なことが始まります。

これまでの科学が知らなかったことですが、断食は、人体を初期化する方法なのです。老化を止め、逆に若返らせ、逆成長を始めます。過去の仙人行の陰には、実はそんなメカニズムが働いていたと考えられるのです。



断食、少食について詳しい研究を続けておられる八尾市甲田病院の院長先生、甲田光雄先生がおられます。先生には、「驚異の超小食療法」（春秋社）という本があります。この本にも、一人の夫

人が青汁断食をもう7年間も続けていることが、臨床例として詳しく述べられています。しかも、一人の稀有な事例ではなく、それに続く人たちが今続々と登場しているのです。一人でも可能であれば、それがすべての人にも可能なことです。ところが、一人ではなく、現在ではそれは複数となっていて、次々と実証例が現れているのです。

海外でも不食の人たちが増えている

海外でも全く食事を摂らないで生きている人たちが増えています。この人たちは、「ブレサリアン（呼吸食の人々）」といいます。

この人たちは、瞑想、呼吸、ライト視、集中のワークによって、進化機能を加速した人たちです。瞑想、呼吸、ライト視、集中の行によって、人は体内の光のシステムを目覚めさせることができます。そうして光によってのみ生きるという生き方を学べば、死ぬことがなくなると信じている人たちです。

プラーナ、あるいは光のみによって生きられるためには、あるレベルの覚醒が必要です。クンダリーニ・エネルギーを目覚めさせることが必要と言われています。

私たちの物質世界は、実は7つのレベルを持ち、7つの次元によって構成されているといわれています。波動トレーニングによって人の意識が精妙になり、チューニングされると、より高い次元に

アクセスすることが可能になります。

人間には、7つのチャクラがあつて、それぞれのチャクラに波動周波数があり、それを目覚めさせていくことによって、宇宙の高いリズムに合わせる事が可能になります。

そのため、チャクラを開発するための波動トレーニングが必要です。

長生きの物語

1. ベストコンディションは食性から

私たちの健康を守るのに一番大切なのは、食性です。毎日のようなものを口にしてるか、それが問題です。

昔から人類は長寿を願って、いろいろな方法を求めてきました。一番熱心に長寿の方法を研究してきたのは、道教といえるでしょう。道教では、道教仙術というのがあつて、早くから長生きと食事に関係があることを知って、何をとれば良いか、深い研究がなされています。その研究成果は、一般には明らかにしてはならない、仙人の秘法としてしか、伝わっていないのが問題なのです。

長寿の方法は、熱心に修行を試みる人だけに伝

えられる秘法であつたのです。そのために、神秘化されて、一般の人には伝えられていない。研究者しか分からない。そのため、すべての人が知るべき情報なのに、一般の人には伝わっていない。そこが問題なのです。

そのことを知って、長寿の方法を新しく科学的に研究する一方、古い道教、仙人の生き方を研究することが大切です。

道教では、黒ゴマを食養の一番にあげていることをご存知でしょうか。道教の修行者たちは、黒ゴマを好んで食べたのです。最近の研究では、黒ゴマに抗酸化の働きがあり、抗老化作用があることがわかってきました。黒ゴマをとると、骨密度を高くすることなども分かっています。道教の1700年前の文献に、「太上靈宝五符序」というのがあります。その本に、次の一節があります。

黒ゴマを1年食べ続ければ、顔色が良くなり、身体が滑らかになる。

2年食べ続ければ、白髪がなくなる。

3年食べ続ければ、新しい歯が生えてくる。

4年食べ続ければ、水中に入っても皮膚が濡れない。

5年食べ続ければ、火の中に入ってもこげない。

6年食べ続ければ、馬のように走れる。

どうも、古い中国の文献には、白髪三千丈式の

誇大表現があつて、その表現のために、とてもそんな話は信じられないと、人に疑いを持たせるのが難点です。道教の学者たちが、その表現で言おうとしていることを正しくつかむ必要があります。

4年食べ続けられれば、水中に入っても水にぬれないというのは、「入水不濡」とあり、これは、皮膚が水をはじくようになる」と解釈すればよく、5年食べ続けられれば、火の中に入ってもこげないというのは、「入火不焦」とあり、これは、保湿能力が高い皮膚になる」と解釈すべきです。6年食べ続けられれば、馬のように走るといふのは、身体全体が若返り、走っても疲れないというように解釈すればよいでしょう。

2. 黒ゴマは老衰を補つ

黒ゴマがこのような長寿に良いということは、道教では昔から分かっています。晋の道教の学者、葛洪の書いた「抱朴子」には、黒ゴマには老化を止める働きがあり、目を良くし、骨を丈夫にする」と書かれています。

現代で仙人食について、一番深く研究しておられる、陳惠運先生は、仙人食としてとるべき重要な7つの食品名をあげておられます。その第一にくるのが、黒ゴマです。

陳先生の7つの仙人食は、「ク・ク・ク・ク・ト・ハ・タ」の7つです。

最初の「ク」は言うまでもなく黒ゴマです。続いて黒酢、クコの実、クルミ、トマト、ハチミツ、卵。以上の7つを、長寿を願う人は毎日とるのが良いと勧められています。

黒ゴマは炒つて、すりこぎで摺つて、1日大さじ1杯弱、黒酢1日同じく大さじ1杯弱、クコの実20粒、クルミ2個分、トマト2つ、ハチミツ大さじ1杯弱、卵は鶏卵1個です。



「7つの食材健康法」より

3. 列仙伝に出てくる仙人たちの食事

列仙伝に偃佺(あくせん)という仙人の話が出てきます。偃佺は、薬草採りの老人で、好んで松の実を食し、身体には毛が4、5寸も生えており、

両眼は四角、疾走すること馬と競うほどであったと書いてあります。松の実を帝堯(ていぎょう)に献じたけれども、堯はそれを服用する暇がなかったということです。当時の人で松の実を採る服食法を習ったものは、皆、200〜300歳にも達したとあります。松の実も、大切な仙人食のひとつなのです。

道教の修行者にとって最大の目的は、「不老長寿」を得ることです。当時の平均寿命は40歳以下といわれていますが、道教の修行者の間では80歳を超えるのは当たり前でした。

中国には、「仙風道骨(仙人の風格で道士の骨を持つ人)」という言葉がありますが、仙人とは道教の理想像を言ったもので、「道士」というのは道教の修行者のことです。中国人にとって道教の修行者とは、元気で健康な老人のシンボルでした。

道教のことわざ「欲得長生、腸中常清」という言葉があります。これは長寿したければ、常に腸を清潔にすべし、という意味で、長生きの秘訣とされます。動物食をすると、腸中常清ができませんので、仙人たちは菜食であるのが普通でした。酒は禁じられていませんでした。そこで、さまざまな薬酒が作られ、修行者たちは生薬を浸した酒を飲み、身体を滋養し、長寿を目指したものでした。

4. 自分にあった方法を探そう

いろいろな健康法を紹介しますが、仙人食だから自分にも良いと直ちに決めないことです。それぞれが自分にあった方法を探ることが大切です。人それぞれ食べ物に対する好みが違うし、体質も体重や身長も違えば、その時患っている病気など、大きな個人差があります。

だから仙人食だから絶対と考えてはなりません。まず、1種類から試してみても、自分の身体に起こる変化を自分自身で見ってみる事です。仙人の7つの食材の中で、自分の1番好きなものを探し、そこから始めることにしましょう。

一つずつ試していけば、自分に何が合い、何が合わないかが分かります。一遍に7つとるとそのどれが良く、そのどれが合わないのか分からず、7つの食材が皆合わないという結論になってしまいかねません。

とり過ぎもいけません。適量を探りながらとっていくことを心がけてください。

良書推薦コーナー

『介護されない人生』

東京大学大学院客員教授 大谷 勝

ダイヤモンド社

この本の表紙に、「アミノ酸が高齢社会を救う」とあります。アミノ酸は最近スポーツライトを浴びてきました。スポーツ界やモデル業界の人たちが、こぞってアミノ酸のパワーを実証し、全世界にアミノ酸の持つパワーがはつきり示されるようになったからです。

シドニーオリンピックで金メダルを獲得した女子マラソンの高橋尚子選手、世界の名だたるトップアスリート達は、こぞってアミノ酸を摂っているのです。第一線で活躍する大勢のスポーツ選手が、絶対不可欠なものとしてアミノ酸を活用しているのです。

アミノ酸に驚異的な健康パワーがあることが明らかになり、20世紀の人々の健康を支えてきたビタミンやミネラルに変わり、21世紀はアミノ酸の時代になる、とまで言われるようになっていきます。

アミノ酸が今や寝たきりの高齢者たちに試され、

奇跡の回復を見せることまで分かってきました。実例をみてみましょう。

Aさんは、81歳です。数年前に脳梗塞で倒れました。旧制高校時代はボート部に所属し、筋骨隆々、胸囲は1メートル近くもあるという健康な体でしたが、就職してからは運動の機会がほとんどなく、十数年の間に筋肉はすっかり脂肪に変わってしまいました。体重、血圧ともに右肩上がりが増え、昔から糖尿気がありました。過食状態が続きました。

数年前、突然脳梗塞に倒れ、重症で、リハビリが始まりましたが思ったほどの回復がなく、右半身不随で手足が動かない状態が続き、リハビリの時間以外は一日中ベッド、食事も介助が必要で食欲も落ち、食べ物、水分も飲みにくく、嚥下障害の後遺症で、朝夕チューブで栄養補給をする、という状態まで落ち込みました。

一か月で5%ずつ体重が減少、80キロから45キロまで体重が落ち込みました。病院が試験的に導入したアミノ酸ゼリーを摂るようになってから、転機がおとずれました。何でもアミノ酸ゼリーは、高齢者の栄養を補うことができ、脳血管障害で呑み込みが良くない人にも飲みやすいゼリーだ、ということでした。

ゼリーは午前と午後、毎日2パックずつ摂取しました。ゼリーを飲むようになって1週間ほどす

ると、久しぶりに自分から食べたい、という意欲を感じるようになりました。最初は、ゼリーだけで腹いっぱいでしたが、そのうち病院食にも手が出るようになりました。

そうになると、体重減少は止まり、1か月経つと逆に体重が2キロ近く増えました。体力も回復し、リハビリへの意欲も湧いてきました。1か月前には立つとふらふらしていたのが、最近は安定して立つことができるようになった、といえます。

B子さん（80歳）のケースをみてみましょう。

B子さんも1年前、脳梗塞で倒れ、救急車で病院に運ばれ、右半身不随になりました。普段、血圧がやや高めでしたが、悪いところの自覚はなく、脳梗塞は突然やってきました。

病院に入院、時々場所や時間が分からなくなり、全介助が必要です。半年前から完全寝たきりになってしまいました。病院にリハビリ体制がなかったのが原因で、筋肉の衰えは一気に進み、手足はやせ細り棒のようになってしまいました。栄養状態は日に日に悪くなり、筋肉はどんどん落ちていった状態の時、主治医からアミノ酸ゼリーを勧められました。

一日1パック、午後食間にアミノ酸ゼリーを摂るようになり、1か月後に変化が見えてきました。肘や足の関節のしこりが取れて、伸びるようにな

りました。指が伸びるようになったので食事の介助が必要でなくなり、左手にコップ、右手にスプーンを持って、ゼリーが自分で食べられるようになりました。食欲も旺盛になり、点滴が必要でなくなりました。一日のうち、かなりの時間車椅子で過ごせるようになってきました。

2か月後、車椅子に座って、リハビリ風船パレーボールを楽しめるまでに回復しました。

この本には、このように病院や、高齢者施設でアミノ酸摂取を病人に勧め、高齢の病人たちがよくなつていった例が紹介してあります。

要介護高齢者の最大の問題は、低栄養状態に陥りやすい、という点にあるのです。ところが、著者の大谷勝教授は病院や施設に、ドクターアミノのアミノ酸配合エネルギーゼリーを病人に摂らせることを提案しました。2006年4月のことで、食事で栄養を十分に吸収できない60歳以上の高齢者70人に、アミノ酸を毎日摂ってもらって、その効果を検証する栄養改善プロジェクトを始めたのです。

ドクターアミノのアミノ酸ゼリーは、世界で初めて開発に成功した、水分が全く分離していないアミノ酸ゼリーです。

アミノ酸は普通、食事から摂取されます。食べ物に含まれるたんぱく質が胃腸で消化されてアミ

ノ酸になり、体内に吸収されたアミノ酸は血液で全身に運ばれて細胞の材料になります。普通の人々が、普通に食事をしていれば、アミノ酸不足はありません。ところが激しい運動をするアスリートは大量にアミノ酸を消費します。高齢者も食が細くなり、しかも消化吸収能力が落ちるので、食事からのアミノ酸だけではやはり不足することになります。そこで、サプリメントという形でアミノ酸をダイレクトに摂る、という発想が生まれたのです。

ドクターアミノのアミノ酸ゼリーは、水分が全く分離していないゼリーなので、寝たままでも飲むことができます。

70人の高齢者にアミノ酸ゼリーを摂ってもらって、1か月が過ぎると、70人中50人に0.1キロ以上の体重増加が認められました。1キロ以上増加した人は17人いました。体重が増えなかった人でも、ほとんど減少がストップしました。

私たちの体は、使うことによつて強くなります。使わなければ機能があつという間に衰えていきます。アメリカの健康な人を対象にした研究によると、1週間ベッドで安静にしたり、ギブスで関節を固定したりすると筋力は10〜20%落ちてしまい、その後1週間ほど訓練しても3〜4%しか筋力は取り戻せなかった、ということです。これ

は、医学的には廃用症候群と言われます。廃用とは動かさないこと、使わないことで起こる症候群です。寝たきりになると、さらに筋力は弱くなり内臓の機能も衰えていき、さらに廃用症候群が進む、という悪循環に陥ります。

高齢者が運動せず、じっとしているというのは廃用症候群を引き起こすのでよくありません。毎日せつせと歩くことが勧められるのは、そういう訳です。


高齢者がベッドに寝続けていると床ずれが起きますが、その原因は低栄養にある、と言われます。この床ずれもアミノ酸ゼリーを摂ることによって改善される、と言われます。皮膚のカサカサも改善され、肌が瑞々しくなると言うので高齢の女性にとって嬉しい話です。

介護されたくない人生

東京大学大学院教授 大谷 勝

アミノ酸が 高齢社会を救う

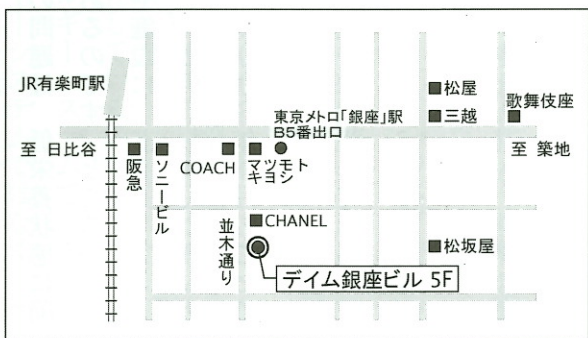
TBS系「夢の扉」で大反響!!
「アミノ酸ってスゴイ!!」
「ドクター・アミノ」に会いたい!!
寝たきりの高齢者たちが手に入れた奇跡の回復!!



お知らせ

200歳まで生きる会
第一回親睦会

- 日時：平成19年3月21日（水）15時～18時
- 場所：ディム銀座ビル5F
- 会費：3,000円
- 講演：七田 眞「健康長寿の呼吸法」
首藤尚丈「オーラで見る健康状態」
- ※定員50名（あと10名ほどです）
- 夕食会（希望者）：18時30分～20時30分



会員様からのお言葉

—お手数をおかけし申し訳ございませんが、「200歳万歳！」第8号で紹介されております「光の水」（重水素減少水）を作る「カンタム」に大変興味がございますが、NPO法人（地球と人類の生命を守る会）のファックス番号（できれば所在地とも）お知らせいただけませんか。

【お答え】
東京都新宿区四谷三十八 萬寿ビル4F
TEL 〇三―五三六一―六〇六七
FAX 〇三―五三六一―二四〇八

編集 後記

「200歳まで生きる会」の第1回大会が東京銀座のディアナサンホールで開催されることになり、その期日が迫りました。定員50名ですが、まだ余裕があります。今すぐお申し込みください。「200歳万歳！」の記事を読んでのご感想をお寄せください。一方的に発信するだけでは、皆様の要望が分かりません。皆様のお気持ちをいれて、なるべく皆様のお気持ちに沿った編集をしていきたいと考えております。

「200歳万歳！」の会報が皆様の意識改革に役立ち、日々ご健康に過ごされる心の養分になるよう、これからもその方針でがんばっていきます。どうぞよろしくお願ひします。(S)

【発行人】
七田 眞

【発行所】
「200歳まで生きる会」
〒695-0011 島根県江津市江津町527-5
☎08555-5215301
FAX 08555-5215797